
おかしな彼

魔桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おかしな彼

【Nコード】

N2927Z

【作者名】

魔桜

【あらすじ】

電波好きな人なら必見の倒錯愛を描いた小説。

私の主は少しおかしい。

私を道具として使ってくださいださらない。時には剣として、そして時には盾として使ってくださいださらない。それは、とても危険な行為と思わざるを得ない。主の懐の広さには頭が上がらないが、そのような中途半端な優しさでは、誰かを救うことはおろか、自分の身を守ることもすらも満足にできないだろう。

だが、我が主が、主たる自覚を持っていないのにも無理はない。なぜなら私とて、我が使命を思い出したのは、ごくごく最近のことなのだから。

私は今まで絵に描いたような普通の女子高校生だった。勉強も運動神経も、容姿も中の中であつたし、人間関係もそつなくこなしていた。

しかし、我が主を見た瞬間に、私の全ては泡沫の夢のように儂く弾けた。

そう、この世界は偽りの世界だったのだ。

私と主が出会つたのは、遙か遠い過去。現代の私に蘇つたのは前世の記憶。主と私は、ご主人様と従者の関係だったのだ。当時は、身分の差がとつともなく高い壁として立ちはだかり、私達の恋は悲恋であることは運命づけられていた。

だが、私達は確かに愛し合っていたのだ。

二人は逢瀬を重ね、そして築きあげてきた二人の絆は鋼よりも強固なものだった。そして、盟約したのだ。

永久に生きよう、と。

結ばれなくとも、一心同体であつた我ら。その想いは、今の私にも確かに脈々と受け継がれている。

だが、古今東西、真実の愛を汚す輩は必ず物語に登場してくる。馬に蹴られ、涅槃へ墮ちるべき存在。六道輪廻の輪より外れるべき

存在。絶対悪。

それは、主を殺した怨敵だ。

奴は大胆にも主の幼馴染として転生していたのだ。何も知らぬ者が見れば、それは仲睦まじいカップルのように見えるだろう。しかし、私から見れば、奴は虎視眈眈と主の首を搔つ切ろうとしているのは一目瞭然だ。

だからこそ、私は何度も主に進言しているのだが、聞き入れてくれない。寧ろ気味が悪いものでも見るような目つきだ。

これは推測だが、私から前世の記憶を消滅させたのも、今の主を人形のように操っているのも、宿敵だろう。そうでなければ説明がつかない。

一体どうすれば状況を打破できるか私は心底悩んだ。毎日、毎日、私は悩み、食事は喉を通らなかった。

そして私は痩せ細り、手足は骨と皮だけになった。索敵する鬼気迫った形相に、両親は少なからず動揺の様子は見られた。だが、私に一切の口出しをしなかった。そういう親なのだ。子どもがどうなるうが不可侵条約を破ることはしない。

普段は苛立つだろうが、そんな気を回している余裕はない。こうして私が頭を悩ましている間にも、主の命は危険にさらされているのだから。

主には、

もう、僕たちに構わないでくれ。

と、命令を頂いたので、その命令だけは従うことができない。

恐らくは、奴の入れ知恵だろう。主の命令を聞くのは従者として至上の極み。だが、私にとって、一番守らなければならぬことは、主を守り抜くという使命だ。ここでおおめおめと撤退すれば、敵の思う壺だ。

そして、ついに答えはでた。

もう一度、私と主が生まれ変わればいい。そうすれば、主も私のことを認めてくださる。来世で愛し合うことができる。そうと決ま

れば、早速実行に移そう。
全ては、我が主の為に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2927z/>

おかしな彼

2011年12月10日11時51分発行